

## 昔話の語りと文体

——桜井小菊の「屁こき爺（鳥吞爺）」をめぐる——

廣 田 收

はじめに

手振り身振りや顔の表情、独特の声色や抑揚などを伴って語られる昔話は、しかしながら音声言語による表現であるところに、その特性がある。とはいえ、音声言語をそのまま考察の対象とすることはなかなか困難である。したがって、語りの性質上たとえ一回きりの語り口とはいえ、語られた方言のまま、また語り間違いの傷や内容上の齟齬<sup>そご</sup>などをあえて整えることはせず、語り口のまま文字に移して対象化するより他はない。国文学にとっては、そのような翻字資料こそ言語表現に関する考察の出発点となるという意味で貴重である。

経験的なことを踏まえていうと、同じ語り手に同じ話柄を語ってもらったとしても、一回一回の語りは微妙に、ときには少なからず異なっている。しかしながら、昔話は、原理的なことからいえば、歴史を貫通する（歴史的な変容を受けにくい）枠組みを基に、歴史性を帯びた説明的な表現を積み重ねて構築された表現体である。このような捉え難さを、どのように克服して昔話というものを対象化できるのか。すなわち、文字に記録された採録を、言葉によつ

て織られた本文として対象に据え、分析するにはどのような方法が必要であろうか。

ところで、最近『中古文学』誌上に掲載された大津直子氏の文章「民俗学的視座から文学研究をするということ」<sup>(1)</sup>は、私にとつては、本当に暗記するまで、今なお何度も読み返してやまないほど興味深い問題提起である。すなわち大津氏は、自己の研究経歴を振り返るとともに、民俗学を「物語の事物や展開、作中人物の造型に至るまでを潜在的に縛り上げる古代性を<sup>あぶ</sup>炙り出す、有効な手法の一である」という。さらに「研究を進める上で」自らが「心がけている」という二点を紹介する。すなわち、第一は「民俗学的アプローチ」において「いかに有効な問いを立てるか」であり、第二は「自らの見出した発想を裏付ける根拠を平安朝の資料に限定して求める」ことだという。なぜなら「民俗学的研究は古代性、深層、発想、始原などという言葉に寄りかかりすぎ、しばしば学問的実証性に乏しいという批判を受けてきた」ことを意識してのことであるという。そして、「昨今、大学は、教育の質保証や学びの汎用性という旗印のもとに教育内容の均質化に舵を切り、学統が支えてきた学問の個性を手放しつつある」という。そのとき「民俗学に限らず」「方法論の持つ個性」を「発展させて行くこと」が重要だというのである。

私は、古代・中世の物語を考察するにあたり、意識的世界よりも無意識的世界を、流行よりも伝統 *tradition* というものを考える必要があるという立場に立つので、民俗学ないしは民俗学的方法の用語は、今もって重要だと考える。もし大津氏の言われるような懸念があるとすれば「古代性、深層、発想、始原」などといった学術的用語、操作概念の概念規定をできるかぎり明確に行うことで、言われなき批判を克服できるのではないかと考える。

そうであれば、今私は、昔話を対象として、語り口に即した表現の考察と、構成的な考察とを併せることで、立体的に分析することが有効であると考え<sup>(2)</sup>。すなわち、古層と新層という軸と、基層と表層という軸とを交差させたところに対象を位置付けることができるであろう。

それでは、昔話の何を考察するのか。

私は、国文学の立場から、言葉による表現として昔話そのものを考察するとともに、さらに昔話を用いて、昔話と同じ枠組みを共有する説話や物語をどのように重ねて捉えることができるかということを考察したいと念願するものである。

## 一 昔話を考察する手続き

昔話の語りには、地域によっても語り手によっても異なるが、必ずひとつの語り口というべきか、語りのリズムとすべきか、一定の表現上の特徴があることは経験的に知られることである。例えば、昔話の語りの文末における「あつたてんがな」<sup>(3)</sup>とか「たでもの」<sup>(4)</sup>「たと」<sup>(5)</sup>などは印象深く、あとあと耳に残るものである。

例えば、本稿で取り上げる桜井小菊さん（長野県下伊那郡旧清内路村）の語りでは、文末に「って」という語句が繰り返されることが強く記憶に残る。これは標準語で言えば、「…た」「…だ」「…で終わらず」「…たって」「…だって」と終わることで、一定のリズムを作り出しているが、語り手が語りの中で継起的に起きる出来事を伝<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>した、というものであることを示す形式であるといえる。ところが、実際の語りにおいては、この文末の語句は、すべての文末に必ず置かれているわけではない。にもかかわらず、どこに置かれるかには、ひとつの規則が働いているようにみえる。

そこで、昔話の採録に即して、構成の基本的単位である事項を抽出するとともに「たって」「だって」という決まった語句が、語られるべき事項とどのように関係しているかをみておこう。私はすでに、同じ語り手が繰り返<sub>レ</sub>し同じ話

柄を語っている場合、変化する部分と変化しない部分のあることを確認したことがある。それは、同じ語り手によって語られた話柄「鳥吞爺」について、

採録事例① 一九七七年の採録。

採録事例② 一九八一年の採録。

採録事例③ 一九八二年の採録。

採録事例④ 一九八二年の採録。

の採録を表現において比較したものである。ここでは、年月を経ることによって語りに「衰え」が簡略化、梗概化が生じるというふうに、語りに変容が生じるのではないかと予想されるかもしれないが、この比較表の限りでは、時間軸の問題ではなく、基本的な構成は変化することがない。むしろ語られる場の微妙な違いによって、語りに変異が生じているということを明らかにしたものである<sup>(6)</sup>。

その後、立石憲利氏によって、同じ語り手の語りについて採録された報告資料がある。

採録事例⑤ 一九八三～四年の間の採録<sup>(7)</sup>。

これを⑤と称して、先の四例に追加して、より考察に妥当性を高めたい。

このような考察を試みるにあたって、かつて柳田国男氏が昔話の中に保管されている神話を復元しようと試みた分析のあることも、もちろん想起されるところである。ただ、今その指摘の当否については一旦留保し、昔話を文体的いしは表現という視点から検討し直してみよう。

## 二 桜井小菊による昔話の語り口

さて次は、前稿で取り上げた採録四例のうち、桜井小菊さんの語り「鳥吞爺（原題・屁こきじじい）」の中でも語りが最も安定している事例（採録事例②）である。

むかアしむかアし あるところオにねエ おじ よいおじさんと欲深じじいとが 正直じじい おじいとおつた  
って。

それからよいおじいはねエ小春日よりのいいし（日）に これえ これ冬じゅう冬のホレ したが 今日は木を切  
りいいってくりやアいいと思つてねエ。昔だもんで やれ お米は貴とくて食べれん。そばかい餅 そばをとつてね  
エ へから 堅くかいてそばかい餅を 朴（ほう）の葉つて 朴の葉つてつたつてみんな知らんかしらん あるら  
朴の葉 大きいね あの葉へ包んで新聞もねえし紙もねえ世の中だもんで へから山へしよつてつてこうゆう木の株  
の上へ置いたつて。木の株 ちゃんと置いて木を切つとつたつて。

へから ばかに山雀（やまがら）チイチイチイチイと騒がしいつて。何をこんな山雀のやろうは騒ぐ。はよお昼  
んなるで そばかいもちでも食べりやアいいわと思つて行つてみたらねエ その山雀チイチイチャンチャン チイチ  
イチャンチャンつて食べちまつて もうちよつとにしとつたつて。このやろめ横着なやろだ ねエ ひとの弁当食べ  
ちまいやがつて。

ほれから追つてつてとつつかめえてねエ 丸呑みに吞んだつて。ほれから そこらゴヨゴヨして まああの弁当は

ねえが この山雀でおなかふくれたで ちいっと仕事してきやアいいわと思つてねエ つて。

また そしたらねエ どうかおへそのとこ モヨモヨっとするで手をやってみたら このけえ尾が出とつたつて  
おへそから。それからおじい是不思議で チュンチュンとしっぱたらねエ

ビイビイビイ こがねザラザラ ごようのおんたから

ていつたつて。不思議なことゆうもんだなア もうしとつしっぱつてみよつて またツンツンとしっぱたら

ビイビイビイ こがねザラザラ ごようのおんたから

こんな珍しいねエ 音のするものをただおいちゃアもつたいねえ こりやアお殿様の屋敷のそばイ行つて ハイ  
怒られるを承知でキーキーキキ木を切つとつたつて。ほうしたら家来のもなアそこで木を切るやつアいつだつて  
いつたつて。隣の屁エこきじじいでございます。屁エこきじじいならここへ来て屁をひれ。へえから殿様の前で行つ  
てピューツと尻をまくつてねエ ツンツンひっぱつたつて。そしたら

ビイビイビイ こがねザラザラ ごようのおんたから

こりやア不思議な尻をしるじじいだなア もうしとつしつてみよ つて。またツンツンとしっぱたら そのとお  
りのこといつたつて。へから殿様 こりやア珍しいわつてつてねエ おそろしほうびをくれたつて たくさん。へえ  
から喜んでうちイ持つてきてねエ おばあちゃんと二人で 小判もあつたり着物もあつたりして こうやって喜んで  
屁も 尻をしてこんなもなアもつたとは珍しいこたアあつたもんだつて 喜んで二人でおると 隣の欲深じじい  
はのぞいてみてねエ 隣のおじいさんが何してそんないい いろいろもつたつたら これこれこうゆうわけだつ  
て。よおしこんだおれももつてこつと思つてねエ 朝とう起きて あのじじいはそばかい餅だつうけど おれは  
どう麦飯を握つて こんなでつけえむすびを味噌つけて握つちまつてねエ 生味噌つけしんぬちまつて へえから

しょってって 仕事やれせんこし。

ほんで はエーえっかに山雀はいんがなアと 見とったって。ほして山雀来てねエ チョンチョン食えかったって。このやろめかっただって。

まんだよおく腹も 腹もふくれるほど食いもせずに その山雀 追って追って追っからかいてねエ こしやくなやろだアつつて キャンキャンキャンキャンかんで呑んじまったって。

今にここイ尾が出るかと思つちやおったって ちよつとも尾は出んて。

まアどつちみち殿様のとこイ行つて 屁をしらにやしようがねえわと思つてねエ そいから殿さん その屋敷のそばイ行つて また木を切つとったって。そしたら そこで木を切るやつはどいつだったで いつもの屁エこきじじ

いでございます。いつもの屁エこきじじいならもう一度聞いてみてえもんだなアと思つて ここへ来て屁をしれて。へえからその悪いじじいは パーンとお尻をまくつてねエ 屁をひらつと思つてもちよつとも屁は出んて。

いっしょこふんでしつたらパーツとババ出ちまってねエ 大騒ぎんなつちやつて。そうしたら殿様この無礼者めつて スパーンて尻イ切つちまったって。そうしたらじじいは ハイ 痛くつて悲しいもんでねエ アーアーえれえことしたもんだって泣いて帰つてきたって。

ほつすりやア うちじゃアおばあはまたねエ おじいさんはいつくきにヤアナにかもらつてくるで 今まで始末したが こんなぼろも焼け こんなぼろも焼けつて ドンドンドンドン火をたいとったって。ほつしたら おじいはあかアすがたでアーンてゆうよな声はした。おじいちゃ重くて悲しがつてくるだかと思つてみて なんだその赤いもなアつたら こりやア こうゆうわけでけつを切られちまつて 小判やいい着物どこじゃねえ 弱つたどんつて。そしたらばあは ばばあええぶそやきか 悲しいなつてゆつたつて。

なんぼごんぼすいほろけ　ごんぼにておきやくしよ。

(採録、一九八一年八月四日)<sup>(8)</sup>

この事例、すなわち採録事例②を基準として、まず煩を厭わず次表のように、事項群を取り出してみた。このとき、下段の事例ごとに語られるべき事項（一文を構成する「主語＋述語」を単位とする）を、①②③④⑤で示した。これがすべて付いていれば、話柄を構成する上で不可欠かつ安定的であることを論証できることになる。

また、文末に「たつて」「だつて」という形式をもたない事項は、二字落チで示した。これは、聴き手の理解を確認するために付加された、昔話の表層をなす解釈的な説明であつて、昔話を構成する「本来的な」事項ではない。

また、左の表は、事項群と「たつて」「だつて」という語りの文末の形式との対応を示すものであるが、さらに、「たつて」「だつて」ほどに明確ではないが、これに準じる、「つて」という形式も追加してみよう。「準じる」というのは、「つて」という文末表現も、やはり語りを縁取る意識が示されているとみるからである。特に採録事例②について、この形式をもつ事項を次表では☆印で示した。

同時に文末の語り口と対応して、事項をなす文の冒頭に置かれる接続句「それから」「へから」「ほれから」「それら」などは、各事項の上に★印を付けた。

ちなみに、ここにいる「接続句」は、語りにおいてストーリーの展開を導くという意味で「転換句」と呼ぶこともできる。また「伝聞句」は、用語としてはこなれていないが、出来事を伝聞したこととして文末を縁取ることから、仮にこのように呼んだものである。

### 三 語り口から想定される昔話の構成

さて、そのような手続きをとることによって、どのような安定した語り口が原理的に想定できるかがみえてくる。

#### 事例②の〔前半〕

#### ★「接続句」／事項群／

#### 事項②の「伝聞句」☆／事例

昔、あるところに良い爺（貧乏な）爺がいた。

☆ ① ② ③ ④ ⑤

★良い爺は、（山へ木を切りに出かける）。

① ② ③ ④ ⑤

貧しい時代には、米の代わりに蕎麦かい餅を食べていた。

① ② ③ ④

昔は、ホウの葉に包んだ。

② ④

★（爺は）蕎麦かい餅を持って行く。

① ② ③ ④ ⑤

★（爺は）山へ行く。

② ③

（爺は、弁当の）蕎麦かい餅を切株に置く。

① ② ③ ④ ⑤

（爺は）木を切る。

① ② ③ ④ ⑤

★ヤマガラが騒ぐ。

☆ ① ② ③ ④ ⑤

爺は蕎麦かい餅を食べようとする。

①

ヤマガラが蕎麦かい餅を食べる。

☆ ① ② ③ ④ ⑤

ヤマガラが死ぬ。

★(爺は、怒って) ヤマガラを丸呑みに食べる。

★(爺は) 木を切る。

(爺は) 臍がムズムズする。

★(爺の臍から) 尾が出る。

★(爺が) 尾を引くと、めでたい音が出る。

(爺がもう一度) 尾を引くと、まためでたい音が出る。

(爺は) 殿様の前でめでたい屁をひろうと考える。

(爺は) 殿様の屋敷の前で木を切る。

★(爺は) 家来にとがめられる。

(爺は) 屁こき爺だと名告る。

(家来が) 爺に屁をひるように命じる。

★(爺は) 殿様の前で尾を引っぱる。

★(爺は) 殿様の前で、屁をひると、めでたい音が出る。

(殿様は) 爺にもう一度屁をひれという。

(爺は) 屁をひると、めでたい音が出る。

★殿様は、爺に褒美を与える。

★(爺は) 喜んで帰る。

①

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④

② ④ ⑤

① ② ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④ ⑤

① ② ③ ④

① ② ③ ④

① ② ③ ④ ⑤

① ②

☆ ☆

☆

☆ ☆

☆ ☆

☆ ☆

（爺は）婆と喜ぶ。

〔後半〕

（爺が）隣爺にわけを話す。

（隣爺は）贅沢な蕎麦かい餅を用意する。

★(隣爺は) 山へ行く。

★(隣爺は) 蕎麦かい餅を持って、様子をうかがう。

★ヤマガラが蕎麦かい餅を食べる。

（隣爺は）ヤマガラを嚙んでしまう。

（隣爺の臍から）尾は出ない。

（隣爺は）ゴボウを食べる。

（隣爺は）  
殿様の前で屁をひろうと考える。

★（隣爺は）  
殿様の屋敷の前で木を切る。

★（隣爺は）家来にとがめられる。

（隣爺は）屁こき爺だと名告る。

（隣爺は）家来に屁をひるように命じられる。

★(隣爺は) 尻をひろうとするが、尻が出てこない。

（隣爺は）殿様の前で、屁をひると、糞が出る。

★ 殿様は、隣爺に罰を与える。



- ②
- ③
- ④

- ①
- ③

$$\begin{array}{c} \textcircled{2} \\ \textcircled{4} \\ \boxed{5} \end{array}$$

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

④  
5

- ①
- ②

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ②
- ③

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

★ 隣爺が泣いて帰る。

★ 隣婆は、家具を燃やす。

★ (隣爺は) 貧乏になる。

「えぐそ焼き」という言葉の由来

★ 隣爺と隣婆が泣く。

(教訓) 欲をかくものではない (人真似するものでない)。

これは、経験的によく知られることであるが、確かに実際の語り口においては、しばしばらつきが認められ、記録上一回だけしかみられないような例外的な事例や、どう考えても語り間違いではないかとしか考えられない事例なども含まれている。

にもかかわらず、この結末を見ると、緩やかではあるが、昔話の備えている原理的な構成が、はっきりと見えてくる。すなわち桜井小菊さんの場合「それから」「へから」などの「接続句」と、「たって」「だって」などの「伝聞句」で縁取るところが、語りを原理的に構成する基本的事項群であるということが浮かび上がってくる。すなわち、語り口における頻度や安定度を勘案すると、基本的事項は、次のような事項群であり、ゴチック体で示した部分がさらに中核をなす事項であるといえる。

☆ ② ④ ⑤

☆ ① ② ④ ⑤

☆ ③ ④ ⑤

☆ ② ③ ④ ⑤

① ③ ④

③ ④ ⑤

#### 四 昔話「鳥吞爺」の基本的構成

〔前半〕

昔、あるところに良い爺と欲の深い爺がいた。

良い爺は、（山へ木を切りに出かける）。

（爺は）蕎麦かい餅を持って行く。

（爺は、弁当の）蕎麦かい餅を切株に置く。

（爺は）木を切る。

ヤマガラが騒ぐ。

ヤマガラが蕎麦かい餅を食べる。

（爺は、怒って）ヤマガラを丸呑みに食べる。

（爺の臍から）尾が出る。

（爺が）尾を引くと、めでたい音が出る。

（爺は）殿様の屋敷の前で木を切る。

（爺は）家来にとがめられる。

（爺は）屁こき爺だと名告る。

（家来が）爺に屁をひるように命じる。

(爺は) 殿様の前で尾を引っぱる。

(爺は) 殿様の前で、屁をひると、めでたい音が出る。

殿様は、爺に褒美を与える。

(爺は) 喜んで帰る。

〔後半〕

(爺が) 隣爺にわけを話す。

(隣爺は) 山へ行く。

(隣爺は) 蕎麦かい餅を持って、様子をうかがった。

ヤマガラが蕎麦かい餅を食べる。

(隣爺は) ヤマガラを噛んでしまう。

(隣爺は) ゴボウを食べる。

(隣爺は) 殿様の屋敷の前で木を切る。

(隣爺は) 家来にとがめられる。

(隣爺は) 屁こき爺だと名告る。

(隣爺は) 家来に屁をひるように命じられる。

(隣爺は) 殿様の前で、屁をひると、糞が出る。

殿様は、隣爺に罰を与える。

隣爺が泣いて帰る。

隣婆は、家具を燃やす。

「えぐそ焼き」という言葉の由来

(教訓) 欲をかくものではない。

このような抽象化の手続きによって確認できることは、語り手が意識しているかどうかとは別に、「たつて」「だつて」という語句を必要とする、語りの一定の傾向、あるいは偏在というものによって、話型の記憶の柱となる枠組みが存在すると推定できることである。このように語りの伝聞形式から、構成的な原理を辿りうる可能性がみえてくるのである。

そうであれば、「殿様」とは歴史的な語彙であり、「蕎麦かい餅」「えぶそ焼き」などは長野県の山村という地域性の強い語彙である、といえる。つまり、昔話そのものが、基本的な構成を担う話型と、その上に歴史性・地域性を担う表現が加えられ、聴き手との関係で説明がさらに加えられるというふうに構築されている、と捉えることができる。

## 五 昔話の基層と古層

私はすでに、採録の事例からひとたび取り出した基本的事項群による構成に対して、さらに抽象度を高めることで、基層をなす事項群が想定されることを指摘したことがある<sup>(9)</sup>。その論旨に即して、この「鳥吞爺」について改めて考えるとところを示せば、

〔図式Ⅰ〕

基本的事項群

良い爺は山で木を切る。

鳥が爺の餅を食べる。

爺が鳥を呑み込む。

爺がめでたい屁をひる。

殿様から褒美をもらう。

基層的事項

爺が木を切る。

爺が鳥を呑み込む。（媒介項、変換項）

爺が黄金をひる。

というふうに、具体的な事項のさらに深層に、基層的な事項を見出すことができる。

このとき、貧しい爺に幸が与えられるには、爺の身の上に起きる転換をもたらす媒介項（もしくは転換項）が必要である。この話柄の場合、媒介項は「鳥を呑む」ということである。すなわち、「鳥を呑む」ことのうちに、異界の侵入がある。この話柄では、めでたい屁をひることに、殿様から褒美を貰うというふうに、歴史性を帯びて分割され世俗化されているが、深層においては、爺が直接、黄金をひることでよい。実際にそのような語りの事例が存在しなく（採録されていない）ても、原理的に想定される語りの枠組みである。つまり、昔話の基層は、

〔図式Ⅱ〕

人物設定

異界の侵入 （媒介項、変換項）

祝福の獲得

というふうに構造化することができる。この構成こそ、完形昔話とか本格昔話と呼ばれる、主人公の身の上に起こる

転換の生じる話柄に共有される枠組みである。

まとめにかえて —「鳥吞爺」と『竹取物語』との関係に及ぶ—

このように分析を進めてくると、いささか唐突に感じられるかもしれないが、『竹取物語』の冒頭部分もまた、同じ構成的な枠組みをもつことが思い付かれる。私は、阪倉篤義氏のかつての指摘に導かれて、すでに「けり」で縁取られる文が、物語の枠組みを構成することについて触れたことがある<sup>(9)</sup>が、この問題の具体的な検討について、今ここで昔話の「…たつて」と結び付けて論じる用意はないが、異なるジャンルを見通す視点の可能性についてだけ述べておきたい。

すでに論じてきたように、〔図式Ⅰ〕は、昔話や物語の基層に認められる伝承的な枠組みを示す。すなわち、上段が話柄 type を、下段がより深層をなす話型の枠組み scheme を示すものと考えすることは許されるであろう。

そのように見ることができれば、『竹取物語』の冒頭部分の基層に〔図式Ⅱ〕に示した昔話にみられると同じ枠組みが働いていることが明らかになる。

今仮に、『竹取物語』の冒頭部分の深層に、いわゆる中国・朝鮮における王の降臨神話・卵生神話<sup>(1)</sup>を予想すると、此彼の伝承の間に、

爺が木を伐る。

爺が鳥を吞む。

爺が黄金をひる。

媒介項・変換項

と共有される基層を抽出できよう。あるいは、爺が山に入る。

天から卵が降りてくる。

媒介項・変換項

卵から少女が生まれる（もしくは、卵から黄金を得る）

と共有される基層を抽出できよう。『竹取物語』の表現に認められるように、翁が竹を伐ることと少女を獲得するのみならず、さらに黄金を獲得するということは、少女と黄金とが物語の基層あるいは古層において同値であることを意味している。

さてここで、昔話と『竹取物語』とを見渡す視野に立つ考察として、私が参照すべきだと考えるものが柳田国男氏の見解である。

柳田氏の論考を端的に纏めて示すことはなかなか困難であるが、「竹伐爺や花咲爺の隣人が、元来資格も無いのに片端ばかり真似をして、結局はつまらぬ損を招いたといふ」「完形説話」は「対照式話法の可なり原始的なもの」であり「表裏二面からの丁寧親切なる叙述法」と認めている<sup>(12)</sup>（『口承文芸史考』九七頁）。ここにいう「完形」とは、「終局がめでたしく」になり、幸福な主人公の幸福を、説かずにはまふ様なことが無いもの<sup>(13)</sup>（同書、一〇五頁）。

今再び、柳田氏の『昔話と文学』を概観してみよう。周知のように柳田氏は「昔話が大昔の世の民族を終結させて居た、神話といふもの、ひこばえであること」から「一国の固有信仰、我々の遠祖の自然観や生活理想を、尋ね寄ることは可能」であり「之を昔話研究の究極の目途とする」という信念に基いている<sup>(14)</sup>（同書「序」、一五四頁）。その

ような考えのもとに、「今ある竹取物語の性質を明かにし、同時にこの一篇の文学と、富士の信仰との稍々間接なる連絡を、見つけ出すこと」を目的としたとする（同書「竹取翁」、一五四頁）。柳田氏の考察がここでも「一国の固有信仰」の追究にあることは言うを俟たない。

ただ、柳田氏の問題とされた『竹取物語』と富士信仰との関係について、私に論すべき用意は何もない。むしろ私の興味は、「竹取物語が純然たる一個の創作では無く、世にある説話を採つて潤色したもの」であり「今日問題にしてよいのは其筆者の働き、即ち何れの部分が新しい趣向の添付であり、どこが其時代に既に行はれて居たもの、踏襲であつたかの境目」を解明することだとされることにある（同書、一六一頁）。それでは、『竹取物語』のどこが既存のものであり、どこが「創作」であるのか。『竹取物語』を剥離して捉える発想はまことに示唆的である。

ここから柳田氏は、「所謂羽衣の説話が、この竹取物語の結構に参与して居るといふこと」を指摘するとともに（同書、一六三頁）、『海道記』の鶯の卵についても論じておられるが、つまるところ、

我々の説話が成長し又変化して行つた経路には、口頭も書卷も元は格別の違ひは無かつた。説話が耳で聴く在来の文芸から、目で看る文字の記録に遷る際に、何か余分の学問なり技能なりが、働いたもの、如く想像するのは誤つて居る。（同書、一七三頁。傍線・廣田）

という。この視野の広さに基く見識の鋭さは看過できない。

そして柳田氏は「仲間の少ない竹取物語」について、「淡々として筆を略して居る処に、沢山の昔々が横たはつて居るらしきこと」に注目している（同書、一七三頁）。この指摘は重要である。口承文芸を母胎として『竹取物語』をどう位置付けるかという問題意識が認められるからである。柳田氏は再び「何れの部分に、竹取物語の文芸としての用途が有つたか」として「他を捜して類型の無い部分」こそ難題求婚の部分であるという（同書、一七三頁）。こ

ここに「説話の変化部分」あるいは「自由区域」がどこにあるか（同書、一七四頁）を言われる。

さらに柳田氏は、『竹取物語』の成立した時代が「文字に著はさざる数々の説話を以て飽和して居たといふこと」を考へるべきであるという。文献のみをみて「甲乙の系統を説かんとする、方法論の誤り」をいう（同書、一七八頁）。ここに至れば、もはや伝播論については留保する慎重さが求められるであろう。

柳田氏はさらに、「竹伐爺」に言及し「へひり爺」の昔話と「福富草子」などとの関係に触れることで、「日本の文学史研究は、この意味に於て前途多望といふべきである」と論ずるに至る<sup>(14)</sup>（同書「竹伐爺」、一九三頁。傍点・廣田）。

『竹取物語』の分析において、私はかねてより「班竹姑娘」の伝承の取扱い<sup>(15)</sup>から始まって、神話学や口承文芸研究によるさまざまな考察を拝読してきたが、みずからの愚を棚に上げていえば、管見の及ぶかぎり正鵠を得たと納得できる成果になかなか出会えなかった。むしろ、柳田氏の説の一々の正邪に拘泥することではなく、学ぶべきは、口承と書承、民間説話と文献との関係を原理的に考へるという柳田氏の視点である。さらに、私が注目したいことは、柳田氏の構想される「日本文学史」像である。

ただし、問題は立場の違いである。柳田氏は『口承文芸史考』『昔話と伝説と神話』の結びにおいて、「私たちの側からいふと、文学も又重要なフォークロアの一種」であり、「前代の人たちの生活技術の痕跡を、考察すべき大切な資料の一つと心得てよい」という（同書「昔話と伝説と神話」、一五〇頁）。

もちろん、私の立場は民俗学ではなく国文学であり、文献文芸も口承文芸も「固有信仰」を探る資料として捉えようとするものではない。

つまり、国文学の側から、文学史というものを、文献の年代誌的な歴史と捉えるのではなく、口承文芸を母胎とし

て文献文芸が成立してくるテキストそのものが、どのように構築されているかを問いたいのである。さらに、同じ仕組みでもって無限に生成されるテキストが系譜をなす、それが文学史であると理解したい。

国文学の私たちからすれば、柳田氏の学は、物語や昔話を、言葉によって表現されたテキストであるということについて、あまり重視しなかったようにみえる。それは関心が「固有信仰」に向いていたからである。まして、口承と書承との関係についても、テキストに即して十分に論じられてこなかったという憾<sup>うら</sup>みが残る。民俗学者である柳田氏は、国文学からいえば、もっぱら伝承の基盤を論じて、伝承そのものの仕掛けや仕組みについては、ほとんど論じなかったといわなければならない。その空白地帯こそ国文学の取り組むべき、これからの領野であるといえる。

## 注

- (1) 大津直子「民俗学的視座から文学研究をすること」『中古文学』第一〇〇号記念号、二〇一六年一月。

(2) 重層性という概念を、私は（言葉によって織られた）本文、すなわち *text* における枠組みとしての重なりをいうものに限定して用いたい。漠然と比喩的に用いることをしない。例えば、基層と表層とは対概念である。共時的にみれば、表現を原理的に支える枠組みが基層をなす。一方、通時的に捉えようと、古層と新層とは、もうひとつの対概念である。空間的・時間的の表現を原理的に支える枠組みであるとすれば、神話は物語の古層をなすとともに基層をなしている、というふうに着用することができる。

重層性という概念がなぜ必要かという点、本文 *text* を引用論やモザイク的な比喩を用いるテキスト論だと、私にはどうも平面的に感じられるので、基礎となる枠組みの上に、新たな主題が加えられるというふうに着用した方が、テキストは立体的に見えるからである。私の強調したい点は、その基礎となる枠組みを基層もしくは古層、重ねられる主題を表層もしくは新層というふうに、基準を設定したいということである。

とはいえ、テキストの重層性を指摘することだけが結論ではない。重層性とは、すでに指摘されているように、地層の

- image に拠るものであるが、テキストの構築性を指摘する枠組みとも交差させている。つまり、仕組みや仕掛け device を明らかにすることによって、古層の枠組みの上に新たに重ねられるさまざまな伝承や表現の絡まり具合、いわば表現のからくりを解き明かすところに、文芸批評のおもしろさがある。残念なことに、重層性という言葉が、安易で恣意的に軽く使われている。だからこそ、私はあえて厳密に用いたい（廣田收「主要語彙略注」『入門説話比較の方法論』勉誠出版、年、五一三―四頁）。
- (3) 語り手・石田ヨミ、水沢謙一編『とんと一つあったてんがな 越後の昔話』未来社、一九五八年。
- (4) 語り手・五十嵐春代、野村純一編『酒田の昔話』酒田市、一九七六年。
- (5) 語り手・伊藤ハルノ、水沢謙一編『雪国の夜語り』野島出版、一九六八年。
- (6) 廣田收「昔話の話型と語り―昔話「鳥吞爺」と唱え言をめぐって―」同志社大学人文学会編『人文学』第一七九号、二〇〇六年三月。
- (7) 立石憲利編『長野県清内路村の民話Ⅰ 桜井小菊の語り』吉備人出版、二〇〇二年、二六―三二頁。
- (8) 伝承と文芸の会編『民間伝承集成 民話』創世記、一九七八年。
- (9) (6)に同じ。
- (10) 廣田收「『竹取物語』の文体と構成―冒頭の表現を伝承の視点から読む―」『説話・伝承学』第二七号、二〇一九年三月（掲載予定）。
- (11) 廣田收「天人女房再考」岡山善一郎・廣田收編『日韓比較文学研究』第七号、二〇一八年三月。
- (12) 柳田国男『口承文芸史考』『柳田国男集』第六卷、筑摩書房、一九六八年、九七頁。
- (13) 柳田国男「序」同書、一五四頁。
- (14) 柳田国男「竹伐爺」同書、一九三頁。
- (15) 例えば、野口元大氏は「『竹取物語』関係資料」として「成立、流布、影響などの諸問題を考えにあたって必要と思われる資料」のひとつとして「班竹姑娘」を挙げている（『新潮日本古典集成 竹取物語』新潮社、一九七九年、二〇一―四頁）。